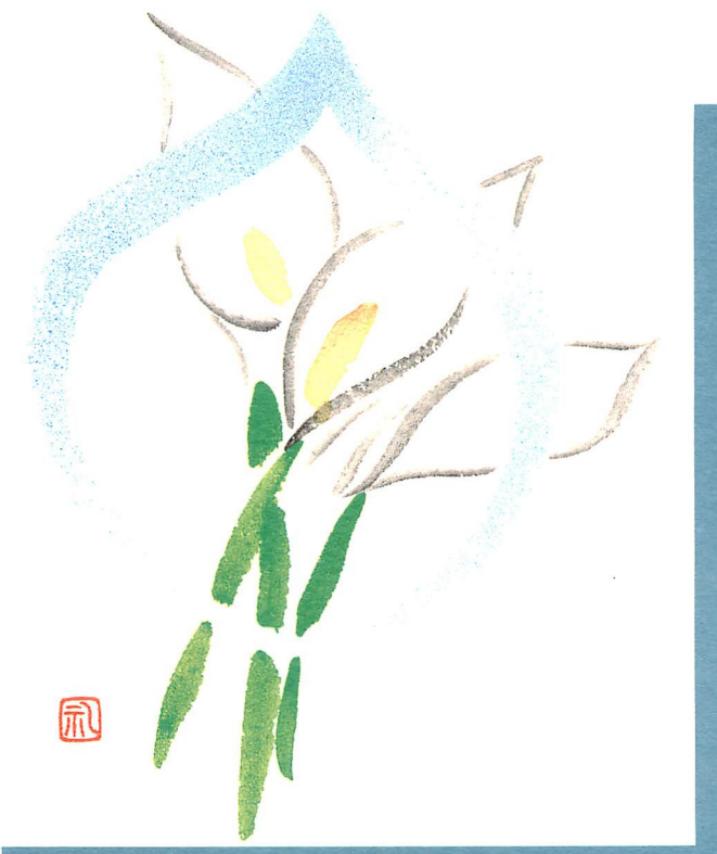


みめぐみの

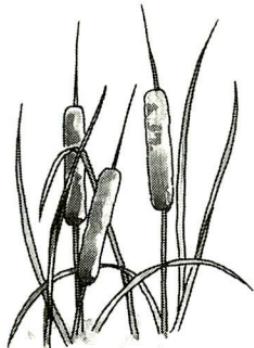
第7部



みめぐみの

第7部

5



大谷光道著

目次

にぎった財布は はなされぬ	2
ケ・セラ・セラ	5
業 運命?	8
どうするか	12
「お任せ」しているか?	15
むすび	22
今年のご歴代の法要	24
もう、あかん	28
あとがき	31

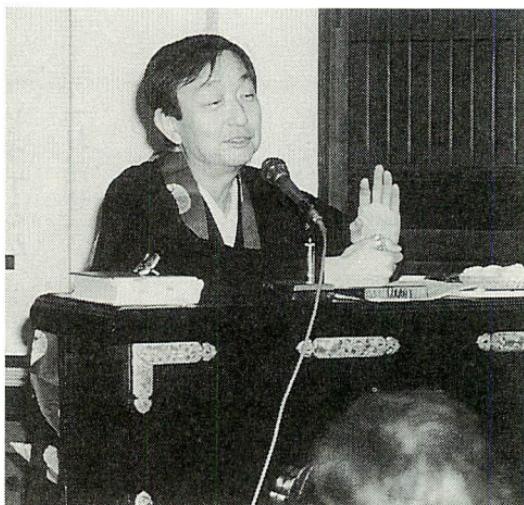
にぎつた財布は はなされぬ

東京の秋葉原や大阪の日本橋にはとて
も敵かなうものではありませんが、寺町とい

えば京都の電気店街です。先日、テレビ

のアンテナの線を長くしようと思つて寺町に買いに出かけました。そのあと
ぶらぶらと歩いておりましたら、ちょうど仏光寺の前を通りかかりました。

仏光寺というのは真宗仏光寺派のご本山。皆さんも御存知でしよう。そこに
お説教の案内の掲示板が出ておりました。上旬は何々師、中旬何々師、……。
そして、その左側にあつた大きな字で書いた標語が目に留まりました。あち



らこちらのお寺によく出でている、黒い板に白い字で書いた標語、あれです。

私がおかしいのでしようか、こういう標語が記憶に残つたことがあります
ん。「いいことだとは思うけど、私にはとても実行できそうにもない」「そ
なのかもしけないが、親しみが持てない」「何を言つてているのか、さっぱり
わからない」（笑）などと感じるのがいつものことです。ところが今回は、
標語の前で立ち止まつてしましました。

「生きることも

死ぬことも

すべてはおまかせ」

と言いながら

にぎつた財布は

はなされぬ。

「生きることも死ぬこともすべてはお任せである」と口では言っているけれども、この手に握っている財布は手放すことは出来ない。」（笑）ということが書いてあつたわけです。これを題材にしてどのようなお説教をなさつてゐるのか、ちょっと中へ入つてみたい気になりました——この掲示板、コマーシャルとして効果満点（笑）。私たち浄土真宗でお念佛をいただく者にとって、大いに考えさせられる標語です。

財布というのは、文字通り中に入っているお金のことなのか、あるいは「財布を握る」とか「財布を持つ」とかいうように、家庭や会社・仕事場で支配権を握っているという意味もあります。そしてまた欲——私たちの欲望全体——を表しているようにも取れます。特にこの部分が他で見る標語と違つて、笑いを誘います。笑いというのは、自分にも思い当たることがあるから出るんですよね（笑）。

この前段の「生きることも死ぬこともすべてはお任せ」というのは、もち

ろん「阿弥陀様を信頼してそのご本願にお任せしている」ということでなければなりません。

ケ・セラ・セラ

昔、いや今からいうと大昔、そう四十年あまり前、映画の主題歌で（アメリカ映画「知りすぎていた男」）『ケ・セ・セラ』という曲が流行ったのを覚えてらっしゃいますか。ケ・セラ・セラ【que será será】とはスペイン語で、「なるようになる」という意味です。

♪ケ・セラ・セラ、なるようになる、先のことなどわからない、……
とペギー葉山という人がよくテレビで歌っていました。思い出されましたか。私の歌い方が悪いのかな（笑）。思い出された方もあるようですが……、大昔の流行歌なんですよ（笑）。この映画がどんな筋であつたのかは見ていいので知りませんが、メロディーが好きなので今でも時々口に出てきます。

「生きることも 死ぬことも すべてはおまかせ」の意味は、このケ・セラ・セラのようにも取れます。

「先のことは私たち人間には分からぬけれど、何か目に見えない大きな力に支配されているような、すでに先のことがすべて事細かに決められてしまつてゐるような、そして人間は無力でこのような力に抗してまで自らの運命を変えることはできないのだ。幸せになるのも不幸になるのも、生きることも死ぬことも、何もかもなるようにしかならないのだ。すべてをあきらめて、無駄な抵抗はやめて、その大きな力のなすままにすべてを任せんしかなりのだ。」と。

こういうのが運命論と呼ばれるもので、「一切の出来事はあらかじめ決定されていて、なるようにしかならず、人間の努力もこれを変更し得ないと見る説」（『広辞苑』）のことです。

これはそもそも努力する気がないのが本音で、それを隠すためにそれらし

い理屈立てをしているようにしか思えません。

「どうなる、

ということのみを考えて、

「どうする」

というのを、「どうせ……」をつけて

もみ消しているのです。

「どうなる」かは「どうする」か
によつて決まるのであって、私自身
のことなのに、私がどこにもいま
せん。

自分の不遇の原因を神や運命のせ
いにして、自分自身では何もしよう



としない怠け心が根本にあるからです。

業 || 運命？

仏教でいう「業」^{ざう}というのをご存知だと思います。業というのは、ある行いがその行いに見合った一定の結果をもたらすことに着目した言葉で、「結果をもにらんだ行為」のことです。自分の業（行い）によって自分の将来が決まるので、運命というあらかじめ決められたものがあるのでないとするのが仏教の立場です。このことから、「自分の現在のあり方は過去の自分の行為の積み重ねによる結果なんだ」という考え方成り立ち、さらに、「自分の前世の行いも今の自分に反映しているので、自分の将来もこれら過去の自分の業によつて決定付けられてしまつてはいるのだ。だから何をしても駄目なんだ。どうせ地獄行きなんだ。」という悲観的な暗い人生観を生み出すことにもなりかねません。

それで、業と運命とが同じものだと勘違いしてしまう人ができ、残念ながら時々そういう人にでくわします。こういう人は、「仏教というのは、自分の決められた将来があつて、それに合わせるように自分自身を無理にあきらめさせる教え」だと思っています。これは、自分の前世という自分自身でも、いやだれからも見ることも知ることもできない、したがつて責任の取りようのわからないことを問題にするあまり、神や運命というよくわからないものに支配されるのと同じように思えてくるからでしょう。

でも、過去の行為が自分の未来を決めるならば、現在の行為はどうなるのでしょうか。現在の行為も同じく自分の未来を決めるはずです。ここに落とし穴があります。過去の行為によつて未来が決まっているのだから現在何をしても駄目だというのは、現在何もしないで済ませようとする理屈付けであつて、怠け心のなせるわざです。

この場合も本音はやはり、怠け心を隠すために、「業」の解釈をねじ曲げ

てしまつてゐることがわかります。



庭儀（おねり）

「タイム・トラベル」と呼ばれるものがあります。タイム・トンネルやタイム・スリップ、タイム・カプセルなどタイム（時間）の付く用語ばかり出て
乗つて過去や未来に旅行する

テレビなどで時々やつてゐるS F映画（空想科学映画）というのがありますね。私はこういうのが好きで見始めると何もかもそっちのけで最後まで見てしまうほうです。SFの一つに、「タイム・マシン」という機械（乗り物）に

きます。

過去や未来の世界に旅行できるとしたらたいへんすばらしいことで、ちょっと考えただけでも、行ってみたい時代、会つてみたい人、だれでもいっぶい浮かんでくるはずです。もしそのような機械ができたとしたら、どうなるでしょう。

過去を見に行くことを考えてみると、その過去の世界に一時的にでも自分が必ず存在することになるわけですから、その世界を多かれ少なかれどうしても自分でいじつてしまふことになります。これが必ず現在の世界の色々なものを変えてしまうことになります。例えば、何代か前のご先祖に会えたとしましよう。その方に私が何かを言つたことが原因で、私が生まれないことになるかもしれません。

皆さん方も暇^{ひま}があれば昔にタイム・スリップすることを想像してみてください。暇があればね（笑）。

未来を見に行くことを考えてみると、その未来の姿になるような出来事を皆で積み重ねていかなければならぬことになります。例えば、百年先の世界に行つて、すでに人類も亡びていたことを見たとしましょう。これから毎日滅亡に向かつて、決められたスケジュールに従つて生活していかねばなりません。

いずれにしても空想の空想です。タイム・マシンのことを考えれば考えるほど、タイム・マシンが作れないことがよく分かると共に、私たちの作る「業」がどんなものなのか、いかに網の目のように、蜘蛛くもの巣のように絡み合つているかがよくわかります。そしてどうして「私自身」が生まれ、どうして今日を過ごしているのか等々、色んなことを考えさせられます。

どうするか

自分の行いの結果は必ず自分に還かえつてくることを、「自業自得」といいま

す。「自業自得」は、私たちの日常生活に溶け込んだ仏教用語であるという点では嬉しいことです。でも皆さん、悪い方ばかりを想い起こされるのではないかですか。善い行いについても自業自得であって、自分の得た良い結果は自分で善い行いをしたからにほかなりません。

よい結果も悪い結果もその原因を自分自身に求めることで、これからどうするかに反映させることにこそ業の意味があるので、ここに新しい飛躍が始まるのです。「どうなる」と腕組みをしていたものが、「どうする」と一步前進するのです。こう見てくると、業という考え方には「反省」のためにあるのだ、努力・精進のためにあるのだ、ということができそうです。つまり、業というのは『自分の業を主観的に見る』ところにその宗教的意味があるのです。

さて、ここで一步踏み出すについて、「どうするのか?」という問いはあるものの、「こうすればいい」という答えはそう簡単には見つかりません。

元々答えがないから突き当たっていたのですから……。

こんなときこそお念佛です。少なくとも私はいつもそうしています。この答えを教えてくださるのが阿弥陀様の本願力であり、静かに念佛すれば必ず目の前は開けます。苦しみや悲しみのどん底でお先真つ暗でも、その長い長いトンネルの向こうに小さな針の穴のような光明がかならず見えるはずです。自分を真剣に見つめ、自分の問題に真正面から取り組もうとする「私」に、将来を見通し現状を打破する智慧が授けられます。

「これからどうすればいいのか」という将来に対する正しい方向づけとそれに立ち向かう勇気づけをいただく、お護りをいただくという結果を生じます。この標語のお任せとは、阿弥陀様に私に対するアドバイスと後押しの主になつていただき、その主をお任せすることです。これが念佛する「私」の姿です。これは生きることも死んでからのことも同じだと言えます。こう考えてくると、単に「お任せ」というより「お導きのままにお任せ」

というほうがわかりやすいように思えます——でも、標語は歯切れが大事なので「お任せ」となるのでしょうか。

また、「お念佛をしていたらお任せしている自分があった」というように、無理に自分の気持ちに反してまで、お任せするのではないということです。

「お任せ」しているか？

「お任せ」の解釈はこれくらいにして、話しきを元にもどしましょう。

お説教をいつも聴いていると、ご本願の尊さ有り難さが身に染みていて、「生きることも死ぬこともすべてはお任せ」という気持ちになつていてつもりで、口ではそう言つているくせに、ふと気がついたらやっぱり財布をしつかり握っていた（笑）。

似たようなお話しに、「お寺の門をくぐると仏様観音様。また門を出ると“につくき嫁”を思い出して鬼になる。」（大笑）。誤解のないように……。

ここにおいてになる皆さん方のことを言っているんじやないんですから（大笑）。

つまり、阿弥陀様からいただいた仏の心の世界と、凡夫のままの心の世界を、いつも行き来しているのが私たちのようです。いつもお話しする「ぶつばん仏凡一体」です。この標語はまさに「仏凡一体」を言い表したもので。

いつも仏の心に住んでいたらしいのですが、すぐに凡夫の心に戻ってしまいます。それでも仏縁に触れていない人と比べると、比べようもなく幸せな私に気がつかれるでしょう。わずかであっても仏の心に住まわせてもらう時があるのでから、これがゼロであった頃の私と比べるとなんでもない変化です。一とゼロの違いは、「ある」と「ない」の違い、有限と無限の違います。

仏の心の付いてくださっているお蔭で、私が暴走しそうになつても、それを止めてくださる。

にぎった財布ははなされぬ



「につくき嫁」との喧嘩にもブレーキがかかって、心の中で称える念佛がひきつった私の顔を笑顔に変えるんじやないですか。

落ち込んでいても、いらっしゃっていても、お念佛一つで先が明るくなる。

淨土真宗でもっとも称える回数の多いのが正信偈。しょうげ 日常のお勤めから大法要に至るまで必ず称えるのが正信偈です。

攝取心光常照護 弥陀の光明はいつも私を照らし護つてくださっている。

已能雖破無明闇 だから十分に私の迷いは破られているのだけれども、
貪愛瞋憎之雲霧 欲望、怒り、憎しみの雲や霧が、

常覆真実信心天 私のまことの信心の世界に覆いかぶさっている。

譬如日光覆雲霧 例えば日光が雲霧に覆われていても、

雲霧之下明無闇 雲霧の下が明るくて闇がないようなものである。

この日光と雲霧のたとえがまことにすばらしく、大好きです。今日のお話の標語では、「お任せ」の心が日光に照らされる私、「財布」が雲霧ですね。

仏の心と凡夫の心が一体である、仏凡一体。一緒にいるから同居ともいえましょうか（笑）。仏凡同居、この方がわかりやすいですね（笑）。仏凡同居のお話しさはいっぱいあります。

親鸞聖人の語録として有名な『歎異鈔』にも次のようなことが書かれています。

唯円坊（『歎異鈔』の著者といわれている人）が御開山親鸞聖人に「お念佛をしてもあまり躍り上がるような喜びが起こりません。また、急いでお淨土へ行きたいという気持ちも起こりません。」と打ち明けると、親鸞聖人が「私もその不審があつた。おまえも同じ心であつたのか。」とおっしゃる場面があります。

そして、「むしろ喜ばないことによつてこそ、いよいよ浄土への往生は決

まつた”と思えばいい。それは煩惱がそのようにさせているのであって、あまり躍り上がつたり早くお淨土へ行きたいという気持ちが起こつたとすると、煩惱がなくなつたんではないかということで、かえつて心配になることであるよ。』とお説きになります。

凡夫は、ご信心をいただいても煩惱がなくなるというような身ではあります。だから躍り上がるほどのことなのに、煩惱が邪魔をして躍り上がらせないようにしているという、逆説をねらつたおもしろいお示しです。お淨土へ行ける喜び||お任せ、煩惱||財布（笑）、ですね。

いま、私は「逆説をねらつたおもしろいお示し」と言いました。しかしそく考えてみると、一宗の宗祖たるお方が、念佛を勧め淨土に往生することを第一に勧めておられるお方が、「念佛をしてもあまり躍り上がるような喜びが起こらない、急いでお淨土へ行きたいという気持ちも起こらない」と言う弟子に対して、「わしもそうじや」とおつしやつてているのですよ。まあ、こ

んなことを平氣で聞く弟子も弟子ですが、一体これはどういうことでしょう。

こここのところが親鸞聖人というお方が、上に「ド」が付くほどご自身の心に正直なお方であつたということであり、普通ではまねの出来ないとこころです。そしてまたご自身の教義に対する自信、信仰に対する喜びの表われであり、それはそのままご本願に対する絶対の信頼でもあります。「阿弥陀様は『そのままのおまえでいい』とおっしゃつてるのだよ。そのまま以外どうなれるというの。」というお言葉です。今日のお話しに翻訳すると「お任せより財布の方に興味があるのやろ。それでいい、そうしかしようがないやんか」（笑）となります。

私は最近よく阿弥陀様とかご本願とかに、私たちが惚れることをご信心といふのだとお話ししておりますが、これを阿弥陀様の方からいふと、「おまえたちは私の手のひらの上に乗つているんだよ」ということになると思いま

す。阿弥陀様の大きなしつかりした手のひらの上で私どもを飛び跳ねさせて、欲も出したりあるいは喧嘩もしたりして、どうしようもない私どもを優しくご覧になつてているのだ、といえるでしょう。「大きな手のひら」に例えたのは、そこで私たちがどんなに飛び跳ねてもその外に落ちるということがない、しっかりとそこに支えてくださっているということで、「弥陀の大慈悲」といわれるものです。

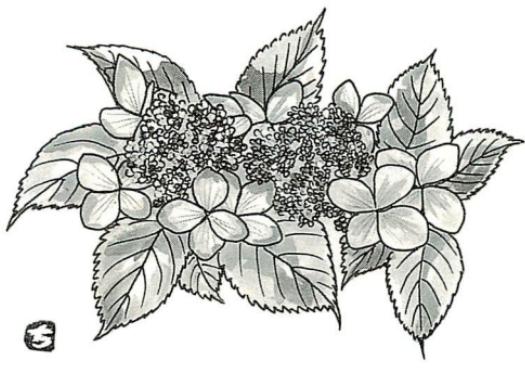
むすび

「仏光寺さんが……」。私の小さい頃、先代（闡如上人）の口からよく仏光寺のご門主とのおつきあいのことを聞きました。今日ここでお話しまする直前に仏光寺の掲示板を見るというのも何かのご縁じやないか、と頂いたところです。

押しつけられる標語でなくて、考えさせられる標語を読ませていただき

にぎった財布ははなされぬ

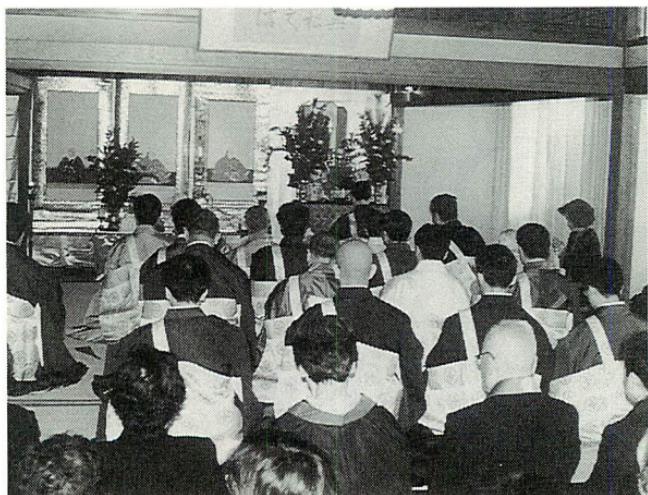
て、お蔭でかんでもかんでもまた味が出る「スルメの標語」（笑）のお話しを
することが出来ました。仏光寺にお参りしたときにはお礼を申し上げたいと
思つております。



今年のご歴代の法要

この度、本願寺第二世・如信上人七百回忌、第十六世・一如上人三百回忌、そして先代第二十四世・闡如上人（光暢前門跡）の七回忌の法要を厳修するにあたり、多数お参りをいただき有り難うございました。

如信上人とご縁が深く、それぞれに第二世と仰がれる真宗木辺派ご門主の木辺圓慈貌下ご夫妻、そして原始真宗願入寺管長の大網義明貌下ご夫妻にも、はるばるお忙しい中を京都までお運びくださりご参詣頂きましたこと、



厚く御礼申し上げます。

今年の一月には、今日お参りの方々や大勢の皆さんと共に茨城県大網の願入寺で、板東曲を勤めさせて頂きました。今日も、如信上人が祖父・親鸞聖人を偲んで毎年京都まで通われたことに思いをいたし、同じく板東曲のお勤めといたしました。(『みめぐみの・第6部』参照)

つぎに、第十六世・一如上人は今から三百年あまり前に活躍された方で、第十五世・常如上人の四番目の弟で、常如上人が隠居の後二十一年間当主を勤められました。さらに、一如上人の弟で如晴という方が願入寺の第十六世となられました。そしてその如晴上人の水戸光圀公との関係から、兄の一如上人を扶^{なす}けることとなり、百間四面の名古屋別院の土地を二代目尾張藩主・光友公から拝領することに繋がったわけです。願入寺との関係が七百年前には如信上人、三百年前には一如上人という図式になっている、何とも深いご縁と喜ばせて頂くところです。一如上人が亡くなられたのは有名な忠臣蔵の

討ち入りの二年前で、元禄時代です。

この機会に少しでも一如上人のご遺徳をしのぶことができればと思い、明日名古屋別院にお参りいたします。

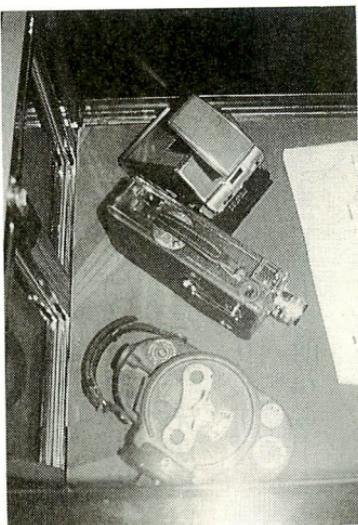
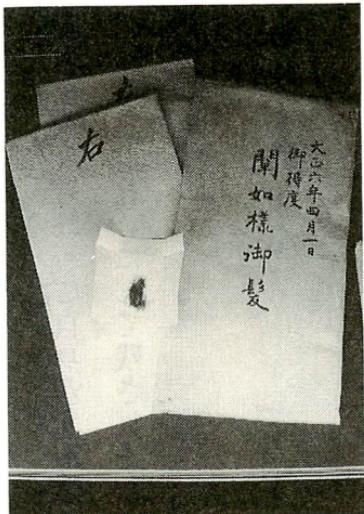
また、木辺様とは第二世が如信上人であるのを同じくしていることに加え、第三世も共に覚如上人であるという深いご縁があります。そして来年は覚如上人の六百五十回忌です。

最後に真ん中の御影が、先代闡如上人です。皆さんのがこの仏間にお入りになる途中でご覧頂けるよう、ご遺物を陳列しました。大谷楽苑によるコーラ



名古屋別院

今年のご歴代の法要



スのことなどは昨日のことのようすに想い出されます。また、その前は動く映像に大変力を入れられ、ご自身が北海道その他地方にご教化に出かけられたときの記録を三十五^{ミリ}にして残されました。その後は十六^{ミリ}で記録されるようになりました。

もう、あかん

その闡如上人のご遷化から早や七年いう時が経つてしましました。

時々「私はもう駄目だ」と言う人に出会います。「もうこの体では、明日をもわからん」、あるいは「来年孫の何々があるけども、それまで生きてられるかどうかわからん」とか、先が短いからこれでお別れかもしれないという趣旨のことを行う人があります。

中にはもう三十年も前からずーっと、会う度に必ず「もう、あかん」ばかり言つて、いまだにびんしゃんしている人もいます（笑）。それは一つには

寂しい気持ちからだと思いますが、「いや、あんた元気やから大丈夫やでー」と言つてほしいのがその顔に現れています。三十年もの間、会う度に「あんた、大丈夫やでー」、私もだいぶん疲れました（笑）。

それに比べて闡如上人は、少なくとも私の前では、一度もそういうことをおっしゃったことがなかつたのを時々思い出します。ですからいくつになられたのか、あまり年を取られたという私たちの認識がないまま、お亡くなりになつたときは八十九歳と半年でした。

のことから、私たちの娑婆世界とお淨土の距離というか、段差といふものを見なくしてくださつたお方だと思います。

お淨土は非常に楽しいところで……、でありながら、御開山親鸞聖人もおつしやるよう、「そう行きたいとは思わない」ところもある、つまりなんとなく敬遠するところです。

闡如上人はそういう「段差」を私たちに感じさせないで、すつとそのま

ま、敷居をまたぐことすらなしに、平らなところをそのままお淨土に行ける
ようにしてくださったような気が、時々しております。今日の七回忌のご法
要にあたって、思い出すことの一つとしてお話しいたしました。

あるいは皆様方も同じようなことを思われていたのではないか。闡
如上人とお話ししていくて「大丈夫ですよ、まだまだお元気ですから」といわ
ねばならんような場面——この娑婆世界との別れが寂しいという顔つきをさ
れたとか——にでくわされた方、おられますか。

「私たちをお淨土へより行きやすくしてくださったお方かな」というよう
なことを思い出して、今日のお話しといたします。

あとがき

みめぐみの刊行委員会

『みめぐみの』各部をご愛読下さって、如何でしたでしょうか。私たちの目隠したままの日常生活に気付かれた方も多いのではないかと思います。このご本を味わっていただくとき、見過ごしてきたものを見なおし、人生の大切な何かが蘇ってくるのが感じられて参ります。

やがて、盛夏躍動の季節を迎えるとしています。いよいよ、『みめぐみの』第7部も浄土真宗の真髓に触れつつ、躍動の展開となつてまいります。

「解りやすく、読みやすい」を基本として編集しておりますが、第7部だけに捉われず平常の疑問も併せて折り込みのハガキをご活用下さり、気付くままにお書きいただいてご投函下さい。お待ちしています。第8部では、また、「読者の頁」の質疑応答欄をつくり、答えていただこう予定です。

なお、掲載分は、著者大谷光道台下よりその都度、御直筆の色紙を贈呈して頂いております。

※折り込みハガキをご投函下さる際には、切手は不要です。

※FAXは、○七五（三五一）三一二〇（みめぐみの刊行委員会）へ。

みめぐみの 第7部

1999年7月5日 印刷
1999年7月10日 発行 定価 200円

著 者 大 谷 光 道

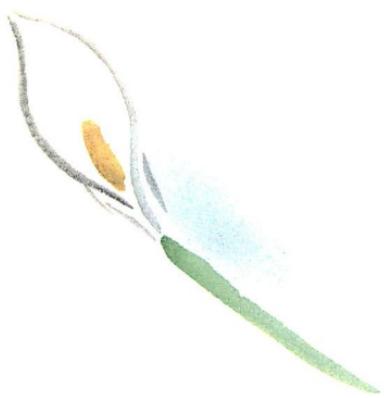
発 行 みめぐみの刊行委員会

〒600 京都市下京区烏丸通七条上ル常葉町754
-8167 本願寺寺務所内

TEL. 075(351)3555 FAX. 075(351)3120

振替口座 01060-5-56990

印 刷 (株) 中 外 日 報 社



みめじみの刊行委員会刊